
左手から。

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左手から。

【コード】

N0952H

【作者名】

市川かうた

【あらすじ】

変わらない退屈な毎日。そんな中で、どうやら隣の席の男子の左手が消えてしまったようです。（よくわからないホラーチックな学園もの）

朝起きて、学校にいった、授業を聞いて、ノートを取って。放課後はいつも決まった友達と遊んで、帰宅する。

そんな、学生なら誰もがするような『普通』だけれど『退屈』な生活。

私はこの生活が嫌いでもなかったが好きでもなかった。つまり、どうでも良かったのだ。

毎日毎日同じことの繰り返し。きっとこれは大人になったって変わらないのだろう。

変わらない日常。変わらない退屈。変わらない未来。

希望とか、そう言った輝いてるものを私は望まない。必要ないからだ。恋愛も友情も、なければ『可哀想な人』と見られてしまうからしているだけ。

つまらない。私の心の中はいつもその眩きでぎゅぎゅに詰まっていた。

さて、これはそんな私がいつものように授業を聞いていた時のことだ。

「ねえ」

声が聞こえた。いや別に心霊現象とかでもなく、普通に人間の声

だっただけでも、私は最初、自分に向けられたものと気づけなかった。

隣の席からそれは聞こえてきたのだけでも、残念ながら私は隣の人と話した覚えもなかった。じ引きで決まっていたからまったく接点がないわけで話しかけられた理由が不明だったから。

幻聴かもしくは別の人に話しかけてるんじゃないだろうかと判断した私は無視を決め込んだ。(しかしこれは実際別の人に話しかけているのだっただけでも無視でもなんでもないわけだ。なんか複雑)

「おおい、かねの金野さん」

かりかりとノートに走らせるシャーペンが止まった。どうやら隣人は私に話しかけていたようだ。まあそりゃそうだろう、こんな小声で話しかけて届く距離なんて私くらいだし。

無視しようと思っていたのに、面倒くさい。という視線を込めて、私は隣の男子を見やった。

明るい茶髪に校則違反のピアスがちらほら。だらしない着方の学ランが目に入った瞬間、私は隣が誰だったのか思い出した。

ああ、そういえばこいつだった。

アホ面でへらへらと笑っているこの男子の名は木沼きぬま美鶴みづる。クラスの中心的存在、といった感じのちよつとちゃらけた奴だ。普段興味のない人の名前を覚えられない私が彼の名を覚えていた理由といえば、自己紹介のときに「名前が女の子みたいで嫌い」だと喚いていたのがうるさかったから。

女子に人気があるらしいけど趣味が分からない。この頃の女の子は騒がしくて軽い男が好きなようだ。

「…何、木沼くん」

答えると、木沼くんはへらりと笑ってから床を指差した。

「悪いんだけど、消しゴム拾ってくんない？」

どうやら落としたらしい。私が床を見回すと、丁度くっつけた机

の（といっても隙間が10cmほど見受けられる）間にぽつんとMが切れて『ONO』になったカバーの消しゴムが落ちていた。

ため息混じりで返事を返す。

「自分で拾える距離じゃない」

消しゴムは木沼くんの左側、まさに手を伸ばせば拾える距離にあった。少しかがめば取れそうなものなのに。

私の指摘に、木沼くんは右手で頭をかいてから小さく呟いた。

「いや、左側だから無理。俺の左手、なくなっちゃったの」

へらへらと、それでも困ったように笑った木沼くんには私は驚く以前に何言っただこいつは、という視線を向ける。

ちらりと横目で確かめてみるが、しっかり彼の左手は学ランの袖から見えていた。

精神異常者？とでも問いたげな私の視線に木沼くんが口を開く。

「お願い。取ってくんない？」

「嫌って言うたら？」

「モンテスキューの顔に変な髭がついたまんまになります」

「それはご愁傷様」

わざとそっけなく言ってやると、木沼くんは困ったように笑ってからすつと右手を上げた。

「せんせー」

ちやらけた声が響いて、クラスメイトの視線が彼に向かう。でもまあ毎度のことなのでクラスメイトもどこか笑いながらだ。

クラスの人気者は大抵何をやっても許される。

「どうした、木沼」

「消しゴム落としたんで拾っていいですかあー？」

怪訝な教師の声の後に木沼くんが立ち上がって言うと、そこかしこで笑い声起きた。教師も苦笑を浮かべる。

これを私がやってたらどうなってるのかしら、なんて馬鹿げたこ

とを思いながら木沼くんの左手を眺めてみる。確かにそこには手があったのだけど、普通立ち上がる時には突いているはずの左手は無気力にだらりと下がっていた。

「そんなこといちいち言わなくてもいいからちゃんと授業聞け」

「はぁーい、すんませーん」

笑いながら言ってきた教師にやる気のなさそうな声で答えて、彼は椅子を足で押して床に屈みこむ。わざわざ右手で消しゴムを拾って、彼は椅子に座りなおした。

小さく続く笑い声を教師が軽く注意して、授業は再開された。

木沼くんの左手が『なくなっ』てから3日後。どうやら今度は左腕が『なくなっ』たらしい。

別に言われたわけではなかったのだけれど、ぼんやり眺めていて気づいた。

授業中も、人と話している時も、体育の授業も、彼の左腕はだらしと垂れ下がったままだったのだ。いくらなんでも不自然だと思うが、周りはまた木沼くんの悪ふざけだということに済ましているらしい。

私は彼を眺めながらぼんやりと次はどこが『なくなっ』てしまうのか考えていた。

「金野さん」

放課後、紅い絵の具を水で溶かしたような色の昇降口で、私は苦笑を浮かべる木沼くんに出会った。

下駄箱の前で、鞆を置いて困ったようにこつちを見ている。

「…今度はどこが消えちゃったの」

左腕が消えてから一週間も経っていた。皆はもう木沼くんの行動に慣れてしまったようだ。

冗談半分本気半分で聞いてみた私に、木沼くんはえーとね、と小さく呟いてから右手で左足を指した。

「ここ。なくなっちゃった」

あはは、と笑う木沼くんは困ってはいるようだけど怖がっているようには見えない。まあ見た目からすればちゃんとそこにあるからかもしれない。

私は木沼くんに近づくと下駄箱から靴を取り出してあげた。

「あ、ありがとう」

まさか私がこんなことするとは思っていなかったようで（消しゴムも拾わなかったような女だしね）木沼くんは少しびっくりしたように私を眺める。

自分の下駄箱から靴を取り出そうとした私に、何か考え込んでいた木沼くんがあのださあ、と呼びかけた。

「何」

「出来ればいいんだけど、靴履くの手伝ってほしいんだ」

「……出来ないの」

「困ったことにねえ」

片足が駄目になっちゃったから靴を履こうとすると倒れてしまっらしい。確かに考えてみれば難しいことなんだろう。

一瞬私は断ろうかと思っただけで、いくらなんでもそこまで人でなしでもないので手伝うことにする。

「靴貸して。そこに座って」

「えー、すのこだよ」

「うるさい。文句言わないの、帰るわよ」

「…はあーい」

私に帰られると困るのか、木沼くんはすのこの上に座った。左手と左足が使えないんだから座るのも大変のようだ。

しばらくしてからふうと息を吐いて座り終えた木沼くんの足に、私はローファーを履かせてあげる。

クラスメイトに見られたら困るような場面だが下校時間ぎりぎりにわざわざ残っているアホなんて滅多にいない。

2足目も履かせてあげると、木沼くんはまたへらつと笑って嬉しそうに礼を言った。

「ありがとう」

「いいえ」

礼なんてされることしてないわ、と言うと木沼くんは何が面白いのかまた笑った。

靴を持って、床に少々雑に自分のローファーを置く。かこんという音がして無事着地に成功したローファーに足を通すと、私はまだ座り込んだままの木沼くんをちらりと見た。

「…お手伝いしましょうか」

「助かる」

左手を差し出しかけて、止まる。

「そういえば左はなかったわね」

「うん」

右手を差し出すと、木沼くんは私の手を握って立ち上がった。結構な体重がかかったところをみるにどうやらホントに左側が使えならしい。もしかしたらわざとかもしれないけど。

一週間以上も続ける理由が分からないしね、と誰にともなく呟いた私は昇降口を出て行こうとした。

「金野さん」

その瞬間、やけに冷えた声が私を呼び止める。

振り返ると木沼くんが笑みを浮かべたまま私を見つめていた。そうして、そっと口を開く。

「金野さんはさ、退屈してる？」

問いの意味がとっさには理解できないでいる私に、木沼くんは笑い続ける。

どうして私は接点も何もない彼と話してるんだろっ、なんてどうでもいいことが頭をよぎった。

「毎日毎日、変わらなくて嫌だなんて思わない？」

木沼くんが少しぎこちなく歩き出す。距離が縮まる。明るい茶色は、差し込んだ夕日で真っ赤に染まっていた。

「俺はね、ずっと思ってたよ」

にこりと笑った木沼くんは私を気にする風もなく横を通っていくと、自転車置き場の方へゆっくり行ってしまふ。

そういえば彼、自転車通学だったわね。ぼんやり思いながら、私は今の言葉を反芻する。

退屈してる？毎日毎日、変わらなくて嫌だなんて思わない？俺はね、ずっと思ってたよ。

いつもちゃらけてる木沼くんが言うには、無駄に重たい言葉に聞こえた。全然噛み合わないように見えて、妙に合っているのがまた重たい。

私はくるりと方向転換すると、昇降口を出て、いつものバス停へ向かうことにした。

「私もそう思うわ」

小さく、彼への答えを口にして。

木沼くんが死んだ。と聞いたのはその次の日だった。

朝のSHRで、担任が重苦しい声で皆に教えてくれたのだ。どうやら登校中のことだったらしい。

自転車で走っていた彼は、突然赤信号の大通りに突っ込んでひき殺されたそうだ。いや、この場合は引かれ死んだ、かもしれない。突然の事故を受け止めきれずに泣き出すクラスメイトもいれば、冗談だろ、という顔で担任を見るのもいる。

突っ込んだ理由は分からない、と言っていた教師の言葉に、皆はまだ納得がいてないんだろう。

私はすすり泣くクラスメイトの声を聞きながらぼんやりと思った。

ああ、右手も『なくなつて』しまつたんだろうと。

左手が使えない状態で自転車をこいで、右手も使えなくなれば後はどこかへ突っ込んで怪我するか最悪死ぬしかないだろう。

簡単な結論だなあ、とか思いつつ、私は昨日の木沼くんの言葉を思い出していた。

金野さんはさ、退屈してる？

毎日毎日、変わらなくて嫌だなんて思わない？

俺はね、ずっと思ってたよ。

不意に、左手が重くなった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0952h/>

左手から。

2010年10月15日23時23分発行